

## 【Oracle システム・調査用ログファイル】

- ・アラート・ログファイル
- ・バックグラウンド・トレースファイル
- ・ユーザー・トレースファイル
- ・リスナー・ログファイル

### ・アラートログ

#### ファイルの出力先ディレクトリの設定

デフォルト  
出力先

～10gR2

(UNIX) : \$ORACLE\_HOME/rdbms/log

(Windows) : %ORACLE\_BASE%\admin\<db\_name>\b\_dump

11gR1～

(UNIX) : 初期化パラメータ DIAGNOSTIC\_DEST で指定されたフォルダ配下の  
DIAGNOSTIC\_DEST/diag/rdbms/alert/<DBNAME>/<ORACLE\_SID>/trace/フォルダ

(Windows) : 初期化パラメータ DIAGNOSTIC\_DEST で指定されたフォルダ配下の  
DIAGNOSTIC\_DEST/diag/rdbms/alert/<DBNAME>/<ORACLE\_SID>/trace/フォルダ

出力先変更方法 : 初期化パラメータ BACKGROUND\_DUMP\_DEST 変更

出力先確認方法 : SHOW PARAMETER BACKGROUND\_DUMP\_DEST

```
SELECT value FROM v$parameter
where name = 'background_dump_dest';
```

出力内容 : データベースの内部エラー情報  
データベース構造に加えられた設定変更履歴情報

ファイル名 : alert\_<SID 名>.log

削除方法 : インスタンス起動中でも削除してよい。新たに作成される

採取方法 : 自動

見 方 : OEM画面のトップのアラート・セクションに表示される  
テキスト・エディタなどで開く

## ・バックグラウンド・トレース ファイルの出力先ディレクトリの設定

デフォルト

出力先 (UNIX) : \$ORACLE\_HOME/rdbms/log

(Windows) : %ORACLE\_BASE%\admin/<db\_name>\b\_dump

出力先変更方法 : 初期化パラメータ BACKGROUND\_DUMP\_DEST 変更

出力先確認方法 : SHOW PARAMETER BACKGROUND\_DUMP\_DEST

```
SELECT value FROM v$parameter
where name = 'background_dump_dest';
```

出力内容 : バックグラウンド・プロセスで発生したエラーの詳細情報

ファイル名 : <SID 名>\_<バックグラウンド・プロセス名>\_<PID>.trc  
アラート・ログファイルの中で、出力されるバックグラウンド・  
トレースファイルの名前が記述される  
<バックグラウンド・プロセス名> : pmon、dbwr、reco、lgwr など  
<PID> : OS のプロセスの ID 番号

削除方法 : ~~バックグラウンド・トレースファイルは、バックグラウンド・プロセスに  
よってロックされる~~  
よって、システム停止もしくは、バックグラウンド・プロセスの停止をし  
てから行う  
削除しても、同名のファイルが作成される  
ただし、削除するときにトレース出力していると、その情報が無くなって  
しまう

採取方法 : 自動

見 方 : テキスト・エディタなどで開く

## ・ ユーザー・トレース ファイルの出力先ディレクトリの設定

デフォルト

出力先 (UNIX) : \$ORACLE\_HOME/rdbms/log

(Windows) : %ORACLE\_BASE%\¥admin/<db\_name>¥**u**dump

出力先変更方法 : 初期化パラメータ USER\_DUMP\_DEST 変更

出力先確認方法 : SHOW PARAMETER USER\_DUMP\_DEST

```
SELECT value FROM v$parameter
where name = 'user_dump_dest';
```

利用目的 : アラートファイルを確認したが、データベースには問題がなく、パフォーマンスが低下している場合の原因追及

出力内容 : SQL の統計情報や実行計画

ファイル名 : <SID 名>\_ora<TID>.trc      <TID> : スレッド ID を示す 5 桁の数字

削除方法 : ユーザー・トレースファイルは、サーバ・プロセスによってロックされる専用サーバ・プロセスの場合は、セッション終了後に削除可能  
共用サーバ・システムの場合は、システムの停止後に行う

採取方法 : (セッション内)

```
SET TIMING ON ;
ALTER SESSION SET SQL_TRACE = TRUE ;
```

疑いがある SQL コマンドの実行 ;

```
ALTER SESSION SET SQL_TRACE = FALSE ;
SET TIMING OFF ;
EXIT
```

(インスタンス全体)

```
ALTER SYSTEM SET SQL_TRACE = TRUE (FALSE) ;
ALTER SYSTEM SET TIMED_STATISTICS = TRUE ;
(FALSE) ;
```

見 方 : TKPROF ユーティリティを使用して、コンバートを行い、テキスト・ファイルを作成する

tkprof <トレースファイル名> <返還後ファイル名> { オプション }

## TKPROF ユーティリティのオプション・パラメータ

オプション	説明
TraceFile	トレース出力ファイル名
OUTPUTFILE	フォーマット済ファイル名
SORT=option	文のソート
PRINT=n	最初の n 個の SQL 文を出力
EXPLAIN=user/password	指定したユーザー名にて EXPLAIN PLAN の実行
SYS=NO	SYS ユーザーとして実行された再起 SQL を無視
RECORD=filename	トレースファイル内で見つかった SQL を記録
TABLE=schema.tablename	実行計画を指定したテーブルに格納

ユーザー・トレースファイルの最大サイズの設定：

初期化パラメータ MAX\_DUMP\_FILE\_SIZE での指定値が適用される

(変更方法)

OEM画面 → [管理] タブ → 「インスタンス」→ 「すべての初期化パラメータ」

ALTER SYSTEM SET max\_dump\_file\_size = '10M' SCOPE = both ;

無制限の場合：'unlimited'

## ・ リスナーログ

### ファイルの出力先ディレクトリの設定

デフォルト

出力先 (UNIX) :

(Windows) : oracle¥diag¥tns¥lsnr¥<サーバ名>¥listener¥trace

出力先変更方法 : 初期化パラメータ USER\_DUMP\_DEST 変更

出力先確認方法 : ?

出力内容 : クライアントからの接続要求に対する接続エラーとアクセス・ログ記録

ファイル名 : listener.log

削除方法 : リスナープロセス起動中は、LSNRCTL ユーティリティを使い、ログファイルを切替えて行う  
コマンド画面を「管理者で実行」

```
$ lsnrctl
```

```
LSNRCTL> set log_file listener2.log
```

```
rm $ORACLE_HOME/rdbms/ listener.log (OS コマンド)
```

```
LSNRCTL> set log_file listener.log
```

見 方 : テキスト・エディタなどで開く

採取方法 : 自動